

原 著

## ブラウニングとハーディの Murder Poem 二篇

—— 「愛と死」 についての一考察 ——

橋 智 子

川崎医療福祉大学 医療福祉学部 医療福祉学科

(平成 6 年10月19日受理)

## On Love and Death in Browning's and Hardy's Murder Poems

**Tomoko TACHIBANA**

*Department of Medical Social Work  
Faculty of Medical Welfare  
Kawasaki University of Medical Welfare  
Kurashiki, 701-01, Japan  
(Accepted Oct. 19, 1994)*

**Key words** : murder, love, aestheticism, eroticism,  
Hardy

### Abstract

Both Robert Browning and Thomas Hardy were deeply interested in love, the strongest instinct in human life, and wrote many love poems with dramatic monologues. Seemingly, the poets have different attitudes toward expressing love; that is, Browning regards love as sweet and sings about it optimistically and romantically, while Hardy regards love as bitter and sings about it pessimistically and realistically.

However, I realized that they have the same attitude to getting at the essence of love. Here I would like to clarify the question by comparing two murder poems.

### 要 約

R. Browning と T. Hardy は共に人間生活において the strongest instinct である恋愛に深い関心を抱き男女の愛の様相を数多く dramatic monologue の手法で語っている。愛に対する二人の詩人の姿勢には、Browning は愛を甘美なものと捉え optimistic に romantic に謳い、Hardy は冷酷なものと捉え pessimistic に realistic に謳っている点では相違があるように思える。しかし愛の本質の捉え方は基本的には同じであることに着眼し、ここでは同一テーマである二つの murder poem を取り上げ比較・解説することで、その問題点を明白

にするのが目的である。

### 1. はじめに

この小論ではロバート・ブラウニング(Robert Browning 1812-1889)とトマス・ハーディ(Thomas Hardy 1840-1928)の murder poem を2篇取り上げる。Browning は「劇的独白」(dramatic monologue) という poetic style を考案し見事に完成した19世紀中期のイギリスの the greatest poet であり、Hardy は19世紀後期から20世紀初頭にかけての the greatest poet である。Hardy は Browning の dramatic monologue に傾倒し、それらを自からの poetic style に導入して多くの narrative poetry を書いている。T. Pauline はこの点を

A characteristic feature of Hardy's poetry is the frequency with which he [= Hardy] introduces direct speech, and this is partly due to Browning's influence<sup>1)</sup>

と指摘し、また C. Day Lewis は poetic idiom, method の類似性について “Browning is the only poet whose idiom is strongly echoed from Hardy's own verse”<sup>2)</sup> とコメントし、そして R. W. King は

We may notice also a curious and unexpected likeness between Hardy's method and that of Browning's 'dramatic lyrics', which are more often an imaginary dialogue or monologue as well as an anecdote<sup>3)</sup>

と述べているように Hardy は ballad や ballad-influenced poems においては、Browning に負うところが大きい。

とりわけこの両詩人は男女の愛の様相をあらゆる側面から直視し数多くの詩を書いているところから 'a poet of love' 「愛の詩人」という点でも共通して高い評価を得ている。しかしその愛の描き方に微妙な相違がある。Browning は

“Love is best”<sup>4)</sup> にも示唆されているように恋愛至上主義をベースに愛を甘美なものとし optimistic に romantic に歌っており、一方 Hardy は “. . . what a fearfully bitter sweet this [= love] was to be. . .”<sup>5)</sup> の一文でも示唆しているように愛を甘美なものとはせず、苦いものと捉え pessimistic に realistic に謳っている点である。

ここでは Browning の 'Porphyria's Lover' (1836) と Hardy の 'Trampwoman's Tragedy' (1902), 2篇の中心テーマ「愛と死」に焦点をしばり、愛が殺人に結びつくプロセスを辿りながらこの両詩人が愛の本質をどのように捉えているかについて考察したい。

## 2

### PORPHYRIA'S LOVER

The rain set early in to-night,  
The sullen wind was soon awake,  
It tore the elm-tops down for spite,  
And did its worst to vex the lake:  
I listened with heart fit to break.  
When glided in Porphyria; straight  
She shut the cold out and the storm,  
And kneeled and made the cheerless grate  
Blaze up, and all the cottage warm;  
Which done, she rose, and from her form  
Withdrew the dripping cloak and shawl,  
And laid her soiled gloves by, untied  
Her hat and let the damp hair fall,  
And, last, she sat down by my side  
And called me. When no voice replied,  
She put my arm about her waist,  
And made her smooth white shoulder bare,  
And all her yellow hair displaced,  
And, stooping, made my cheek lie there,  
And spread, o'er all, her yellow hair,  
Murmuring how she loved me — she  
Too weak, for all her heart's endeavour,  
To set its struggling passion free  
From pride, and vainer ties dissever,

And give herself to me for ever.  
 But passion sometimes would prevail,  
 Nor could to-night's gay feast restrain  
 A sudden thought of one so pale  
 For love of her, and all in vain:  
 So, she was come through wind and rain.  
 Be sure I looked up at her eyes  
 Happy and proud; at last I knew  
 Porphyria worshipped me; surprise  
 Made my heart swell, and still it grew  
 While I debated what to do.  
 That moment she was mine, mine, fair,  
 Perfectly pure and good: I found  
 A thing to do, and all her hair  
 In one long yellow string I wound  
 Three times her little throat around,  
 And strangled her. No pain felt she;  
 I am quite sure she felt no pain.  
 As a shut bud that holds a bee,  
 I warily oped her lids: again  
 Laughed the blue eyes without a stain.  
 And I untightened next the tress  
 About her neck; her cheek once more  
 Blushed bright beneath my burning kiss:  
 I propped her head up as before,  
 Only, this time my shoulder bore  
 Her head, which droops upon it still:  
 The smiling rosy little head,  
 So glad it has its utmost will,  
 That all it scorned at once is fled,  
 And I, its love, am gained instead!  
 Porphyria's love: she guessed not how  
 Her darling one wish would be heard.  
 And thus we sit together now,  
 And all night long we have not stirred,  
 And yet God has not said a word!

ポーフィリアの恋人

今宵は早くから雨が降り始め  
 やがて不気味な風がざわめき立ち  
 楡の梢を容赦なく引き裂き  
 湖水を波立たせ 慟哭に任せた  
 私は張り裂けそうな心で 聞いていた

ポーフィリアが小屋に忍び来ると たちまち  
 冷気は失せ 嵐の音は途絶えた  
 彼女はひざまづき 燃え落ちた火床をかき立て  
 ぱっと燃え上がらせ屋内をすっかり暖めると  
 立ち上がり 水のしたたる  
 外套とショールを脱いだ  
 汚れた手袋をかたわらに置き  
 帽子の紐を解き 濡れた髪をはらりと垂らし  
 ようやく私の側に座ると  
 「あなた」と呼びかけた 返事をしないと  
 彼女は私の腕をとり 自分の腰を抱かせ  
 なめらかな白い肩をあらわにし  
 艶やかな金髪を片方にかきよせ  
 肩を傾けて そこに私の片頬をもたせ  
 金髪ですっぱり包み込み  
 「あなたを心底愛しています」とささやいた—彼女は  
 どれほど精根尽くしても 人間の弱さ故に  
 女の誇りや虚栄のしがらみを断ち切り  
 この悶える紅蓮の炎に身を焦がすことも  
 永遠に私のものになることもかなわずにいた  
 しかし時折情念のうねりに身をゆだね  
 今宵のように華やいだ饗宴の席を抜け出し—  
 彼女への不毛の愛に絶望している  
 私にふと思いをはせると いたたまれず—  
 この暴風雨について逢いに来たのだ  
 彼女を見上げるとその目にはまがいもなく  
 愛する幸福と誇りが満ちあふれていた  
 今こそポーフィリアが私を崇拜していると分かった  
 この驚きに私の胸は張り裂けんばかり  
 いやます感情の高ぶりの中で どうすべきか思案した  
 この瞬間こそ 彼女は私のもの 私のもの  
 美しく 純粹で 真実の女性  
 なすべき事がひらめいた 私は彼女の髪を  
 一本の長い金色の紐にし  
 その華奢な首に三度巻きつけ  
 絞め殺した 彼女は苦痛を感じなかった  
 たしかに彼女は何の苦痛も感じなかった  
 蜜蜂を抱いて閉ざした蕾にふれるように  
 私は彼女のまぶたをそっと開けてみると  
 澄んだ青い眼がまたもほほえんだ  
 そこで私は首に巻いた髪紐をゆるめ  
 燃えるような口づけをすると  
 彼女の頬は 今一度紅に染まった

私は彼女の頭を元の状態に支え起こし  
 今度は 私の肩にもたせた  
 彼女の頭は静かに私の肩にのっていた  
 微笑を浮かべたバラ色の愛らしい顔は  
 無上の歓喜に酔いしれていた  
 さげすんでいたものすべて瞬時に消滅し  
 代わりに 愛するこの私を手に入れたのだから！  
 ポーフィリアの恋 彼女の唯一の宿望が  
 どんな形で成就するか思い及ばなかったであろう  
 私たちはこのように抱擁したまま  
 身じろいもせず 一夜を明かした  
 しかし 神は一言もおっしゃらなかった  
 (訳詩は筆者)

## 3

この詩は Browning が24歳の時書いたもので dramatic monologue の最初の試みと見られる。男の monologue の形で、男女の心理の綾を絡ませながら殺人に至る経緯を一人で淡々と語っていく様は一幕物のスリラー劇を見る思いである。1836年1月に初めて Monthly Repository に‘Z’の匿名で、“The rain set early in to-night”のタイトルで掲載された。しかし1842年に‘Madhouse Cells’のIIと題して Dramatic lyrics に収録されたが、1863年以降は‘Porphyria’s Lover’と改名、Romances のカテゴリーに分類されている<sup>9)</sup>。

この詩は Browning の詩としては短い60行であるが、5行を1単位とする12スタンザを一つの詩に構成している。そして1スタンザの1, 3行に対して2, 4, 5行は one word 頭語を下げ、通例の 4-stress iambic の4行連句に1行付加し末行と同じ押韻をして ababb と変化をもたせた5行詩にしている。前30行では女の情動・心理を語り、後30行では男の情動と心理を語る中で情景は静から動にそして再び静へと回転する。先ず行を追って解説することにする。

最初の5行は雨・風・湖水の荒れ狂う音による聴覚的な情景描写であるが、この自然現象には“I listened with heart fit to break” (1.5)と、男の苦悩する心裏をイメージ的にだぶらせて描写している。それはポーフィリアがやって来た途端 “She shut the cold out and the

storm” (11.6-7)の一行で説明がつく。つまり彼女は単に物理的に外の冷気と嵐を閉め出しただけでなく、男の心の中で逆巻いていた嵐を鎮静したのである。ところがあれほど女が来るのを待ち望んだ男と暴風雨について逢いたい一心で駆けつけた女の間で当然見られるラブシーンはなく、二人の間に何となくぎこちない雰囲気は漂う。ナレーターは二人の不毛な恋の成り行きを “Too weak, for all her heart’s endeavour, / To set its struggling passion free / From pride, and vainer ties dissever, / And give herself to me for ever.” (11.22-25) と3行で語りつくす。つまり身分違いの恋であろう、女は家柄・教育・財産などステータスに根ざしたプライドと虚栄のため、地位も名誉もないしがたない男との恋に生きることが出来ないのである。そして男は “Passion sometimes would prevail” (1.26) と、女がふと見せる気まぐれな愛情に未練を残し翻弄されている。 “... so pale / For love of her, and all in vain” (11.28-29) に描写されているよう男は片思いの情熱に身を焦がし練獄にも似た苦しみにあえいでいる。従ってその夜二人が逢った瞬間の時間・空間的空白には女の逡巡と男の不毛の愛の悲哀と不安がぬりこめられている。

しかしその夜、彼女はこれまでの迷いを払拭したかのように男に愛をささやき扇情的な姿態で男を誘う。激しく揺れていた女の心は情念のうねりにのみこまれ、初めて男に身を任すのである。あらわにした白い肌を男に触れさせ、丈なす金髪で男を包み込む。この時点で静から動に転じ、一気にエロスと死の世界へと展開する。今まで男のコンプレックスを逆なでしていた高慢な態度とは打って変わって、自ら開いて見せた女体と愛情の深さを永遠の愛と受けとめた男は “... at last I knew / Porphyria worshipped me...” (11.32-33) 「自分が初めて女から崇拜されている」との歓喜は驚嘆に変わり、この思わぬ成り行きをどう受けとめてよいか戸惑うばかり、そして激昂する感情の中で “That moment she was mine, mine, fair / Perfectly pure and good” (11.36-37) 「この瞬間こそ彼女は私のものだ」と、至福の一時に陶醉する男は、一体化

した二人の愛を永遠に完成したいとの崇高とも言える感情の高まりの中で、全身全霊で表した女の愛をこの瞬間に凍結するために女の命を断つことを思いついた。そこで男は凶器を取りに行く瞬時も惜しむかのように、女の髪を紐とし、3度首に巻きつけて絞殺する。

では、なぜ自分の手で絞殺しなかったのか、メタフォリカルに考えてみると、金髪は「不滅、純粹、愛の強さ」<sup>7)</sup>のメタファーであり、3度の3の数字は「死と再生、完成、成就」<sup>8)</sup>、そして「男性的特徴」<sup>9)</sup>のメタファーである。つまり女は愛し合う行為の絶頂で殺され不滅の愛を完成したことを意味しているように思える。と言うのは、“I am quite sure she felt no pain”(1.42)、“Laughed the blue eyes without a stain”(1.45)、“The smiling rosy little head,”(1.52)に表現されていることから推測できるからである。勿論男の希望的観測が重ねられてはいるが、エクスタシーの瞬間に女の命を断ったことへの自負心が“I am quite sure”(1.42)に表れているように思える。そして“her darling one wish”(1.56)つまり世俗の雑念から解放され恋人との永遠の愛に生きたい彼女の宿望をかなえてくれたことを喜んでいて、女の心裏を代弁して語っている。しかし女の真意の程が直接聞かれないところに男の独善的エゴイズムが見えかくれし、二人の命をかけた純愛の結末を素直に受けとめることが出来ない。いずれにせよ、男は凶行の後、心静かに神の赦しか、はたまた神の咎の声を聞こうとしていたのか“*And yet God has not said a word!*”「神から一言の咎もなかった」と結んでいる。

この一行に見る限り男の罪悪感はない。むしろ死をもって愛する女を守ったと誇らしげでさえある。そこで、この男を正常か異常かという常識論で裁くか、倫理的道義的域を超越した審美的世界に生きる男の美学と解釈するか、或いは独善的男のエゴイズムと見なすかという問題が生じてくる。Browning 自身、一時期にせよこの詩に‘*Madhouse Cells*’「精神病室」と表題をつけていた経緯から推して、男の行為をアブノーマルと匂わしていたのかも知れない。しかし後に‘*Porphyria’s Lover*’と改題し、

Romances に分類したのは何故だろうか。一つには当時のヴィクトリア朝社会の思潮と関係があるように思える。福音主義的道德律からすればこの男を真正面からノーマルとして扱うには社会に対する抵抗があったのではないだろうか。また一つには、“*Love is best*”を信奉する Browning の情熱に年齢的深みが加わり物の見方に余裕が出てきたことから、この種の犯行は、恋のために惹起する一時的な精神異常・錯乱状態の中でなされる可能性を是認し、正気と狂気の区別の微妙さをベールで包み愛の超越性をうたう romantic love として、世紀末的耽美主義につながる時代への挑戦、美とエロチシズムに根ざした modern poem として再登場させたものかも知れない。しかし W. David Shaw が “. . . the strangler’s scheme for prolonging sexual submission is a grotesque perversion of the same principle.”<sup>10)</sup>と男の行為を非難している。つまり、プラトンのエロスの原理を歪曲し自分の都合で詭弁を弄していると指摘しているのであろうか。確かに完全な愛・美を永遠に凍結するために殺人に及んだ男の態度には耽美主義を盾に自分の行為を正当化し、あえて納得しようという心理が見られる。例えば“*That moment she was mine, mine. . .*”の一行にも男のエゴイズムの独占欲と永続しない愛の不確かさ・無常からのがれたい男の焦りがうかがえる。「この瞬間私のもの」は「次の瞬間私のものでないかも」の裏返しであり、得た愛を失う恐怖心と不安がこめられている。その観点からすると愛とは美しき瞬間の死であるという美学的建て前と愛の裏切りからの現実逃避を希求する本音の矛盾をつくパロディーのようにも思える。唯、“*And yet God has not said a word!*”の最終行の咎にも似た詩行が Browning の‘*Evelyn Hope*’の第4スタンザ “. . . God above / Is great to grant, as mighty to make, / And creates the love to reward the love.”「創造主である神は偉大にして慈悲あり、人間の罪・咎も赦し給う。神は愛である」に見られる。この詩行のソースはマタイ伝5章45節「天の父は、悪い者の上にも良い者の上にも太陽をのぼらせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らして下さる」から引用し

たものである。従って Browning は男女の愛の本質が内包する矛盾と限界の中で、なお求め合う男女の恋慕の激しさを肯定した上で、事の是非の判断を神の御心に委ねるかに結んだのは、男女のミステリアスな愛はいかなる人事を尽くしても、神の摂理と慈悲をもってしても、簡単に解明できない永遠の謎として余韻を残しておきたかったのではないだろうか。

## 4

次に Hardy の詩 'A Trampwoman's Tragedy' を取り上げることにする。

'A Trampwoman's Tragedy' (1902) は Hardy の dramatic monologue によるバラッドの中でも傑作と目されている。これも男女の愛による殺人事件を扱っているが、'Porphyria's lover' が女の愛を独占したので絞殺したのに対して 'A Trampwoman's Tragedy' は女の愛を独占したいが故に、その愛を奪おうとする相手の男を刺し殺すのである。ここでは女の monologue によって自然・運命・相手・自分が回想的に語られていく。

## V

Now as we trudged — O deadly day,  
O deadly day! —  
I teased my fancy-man in play  
And wanton idleness.  
I walked alongside jeering John,  
I laid his hand my waist upon;  
I would not bend my galnces on  
My lover's dark distress.

## VII

Inside the settle all a-row —  
All four a-row  
We sat, I next to John, to show  
That he had wooed and won.  
And then he took me on his knee,  
And swore it was his turn to be  
My favoured mate, and Mother Lee  
Passed to my former one.

## VIII

Then in a voice I had never heard,  
I had never heard,  
My only Love to me: 'One word,  
My lady, if you please!  
Whose is the child you are like to bear? —  
*His?* After all my months o'care?  
God knows 'twas not! But, O despair!  
I nodded — still to tease.

## IX

Then up he sprung, and with his knife —  
And with his knife  
He let out feering Johnny's life,  
Yes; there, at set of sun.  
The slant ray through the window nigh  
Gilded John's blood and glazing eye,  
Ere scarcely Mother Lee and I  
Know that the deed was done.

## X

The taverns tell the gloomy tale,  
The gloomy tale,  
How that at Ivel-chester jail  
My Love, my sweetheart swung;  
Though stained till now by no misdeed  
Save one horse ta'en in time o' need;  
(Blue Jimmy<sup>11)</sup> stole right many a steed  
Ere his last fling he flung.)

## XI

Thereafter I walked the world alone,  
Alone, alone!  
On his death-day I gave my groan  
And dropt his dead-born child.  
'Twas nigh the jail, beneath a tree,  
None tending me; for Mother Lee  
Had died at Glaston, leaving me  
Unfriended on the wild.

## XII

And in the night as I lay weak,  
As I lay weak,  
The leaves a-falling on my cheek,  
The red moon low declined —

The ghost of him I'd die to kiss  
Rose up and said: "Ah, tell me this!  
Was the child mine, or was it his?  
Speak, that I rest may find!"

XIII

O doubt not but I told him then,  
I told him then,  
That I had me from all men  
Since we joined lips and swore.  
Whereat he smiled, and thinned away  
As the wind stirred to call up day . . .  
— 'Tis past! And here alone I stray  
Haunting the Western Moor.

5

あたしらは とぼとぼ歩いた—ああ やり切れない日  
ああ やり切れない日  
あたしは 気紛れの戯心で  
恋人をからかった  
ふざけるジョンに寄りそって歩き  
彼の手をとりあたしの腰に  
悲嘆にくれる恋人には  
目もくれないで

7

宿の長椅子に坐った みんなで並んで  
4人で並んで  
あたしは ジョンの横に坐った  
彼があたしを口説き落としたと見せるために  
すると、彼はあたしを膝にのせ  
こんどは おれが恋人になる番だ  
と放言した マザー・リーは  
あたしの前の愛人の相方にまわった

8

その時 いままで聞いたことのない  
一度も聞いたことのない声で  
あたしの たった一人の愛人が言った なあお前  
頼むから 一言だけ教えておくれ  
生まれて来る子は誰の子か  
奴の子か 長い年月おれがいとしんでやったのに  
ジョンの子でないのは神様だつてご存知 ああ でも  
あたしは「そうだ」とうなずいた—なおもからかい続けて

9

すると 彼は はね上がりナイフを振りかざし  
ナイフを振りかざし  
ふざけるジョンの命を断った  
そう あの場所で 夕暮れ時のこと  
すぐそばの窓から 射しこむ斜陽が  
ジョンの血潮と空ろな目に映えて きらりと光った  
マザー・リーもあたしも気づかぬうちに  
この凶行は終わった

10

宿の人たちは語るだろう あの凄惨な話を  
あの凄惨な話を  
アイヴルの町の牢獄で あたしのいとしい人が  
絞首刑になった話を  
これまでやむなく 馬一頭を盗んだほかは  
何一つ悪事をしたことはなかったのに  
(大悪とう ブルー・ジミーは多くの馬を盗み  
うまく逃げおおせたというのに)

11

その後 あたしは流浪の旅 一人ぼっちで  
たった一人ぼっちで  
彼が絞首刑になった日  
牢獄近くの木の下で  
うめき声を上げ 彼の子を死産した  
誰一人看取ってくれる者としてなく  
そう マザー・リーは  
グラストンで死んでしまって  
あたしは荒野に一人残されていたから

12

その夜 衰弱して横たわっていると  
衰弱して横たわっていると  
頬に落ち葉がふりかかり  
赤い月が 沈みかけていた時  
死ぬほど キスしたい あの人の幽霊が  
ふと現れ 問いかけた  
「ああ この事だけ教えておくれ」  
この子は わしの子か それとも奴の子か  
話しておくれおれが安らかに永眠できるように

13

そこであたしは彼に話した  
あたしは彼に話した

あたしたちが唇を重ね愛を誓ったその日から  
 他の男には目もくれなかったことを信じてほしいと  
 それを聞くと 彼はほほえみ かき消えた  
 風が立ちさわぎ 夜明けを呼びおこす頃  
 ああ 今となっては過ぎたことあたしは西部の荒野に  
 さまよい出てさすらう身の上だから  
 (訳詩は筆者)

この詩は8行、13スタンザで構成されている。詩型は伝統的バラッド iambic tetrameter abab や abcb に対して aaabcccb の押韻で2行目に付けられた half-line repetition は Hardy 独自の創意工夫による新しい形式である。しかし最後に幽霊を登場させた超自然的な描写はバラッドを意識してのことであろうか。ここでは紙幅の関係で8つのスタンザを取り上げて解説する。4連までは比較的静かに女の優しさと美しい風景描写が続く。しかし5連では女のむごさと攻撃性が状況を一変させる。

男女4人の旅職人 — trampwoman と fancy-man, Mother Lee と John — が長い歳月旅して歩くうちに、女は肉体的疲労と精神的苦痛の極限状態の中でうっせきした不満が爆発、女の愛と優しさが残忍さに変容し、恋人をからかい嫉妬に苦しむ姿にうっぷんのはけ口と快感を求めていくのである。“I teased my fancy-man in play and wanton idleness” と、好きでもない John とたわむれ情念のみだらさを恋人に見せつける。7連では、ようやくその夜泊る宿まで辿りつき長椅子に並んで坐わり旅の疲れをいやす情景の中で、女の残酷さと虚栄は鎮静しないまま、なおも John の淫らな誘いにのる姿態を見せる。疑念と嫉妬にかられた愛人は女の腹の子を “Whose is the child you are like to bear? - His?” とつめ寄る。一言「あなたの子よ」と言えばすむものを、ブレーキがきかない女は身勝手にも自分の愛を疑われたことへの腹立ちも相乗してか素直になれず「彼の子よ」と言ってしまう。この愚かさともどかしさに自分でも “O despair!” と叫んでいる。9連では嫉妬で逆上した愛人が自制しきれずナイフで John を刺殺、一瞬の惨劇に急転化する。まるで静止した劇画の一コマを見る思いで、そのイメージの鮮

明さが残像となって心にやきつく。女が結果的に二人の男を死に追いやった原因が自分の浅はかで気紛れな振る舞いによるものであると言う罪の意識を全然感じていない点は Porphyria の愛人と同じである。Mother Lee も死んで一人ぼっちになった女は “... I gave my groan and dropt his dead-born child” と死産する。10連までは女の罪を責めていない Hardy がこの dropt の一言で女の業の深さを断罪しているようだ。と言うのも、dropt は雌ひつじが子を産み落とす時に使用する言葉で普通人間には使わないからである。しかし Hardy は最後の2連では現実と幻想の交錯する超自然的な演出で、女と愛人を語らせることによって和解させ二人に救いの手をさしのべている。男は幽霊となって女の許を訪れ、今一度生前の会話をむしかえし、“Was the child mine, or was it his?” と問い正す。女が「あなたの子です」と答えると、幽霊はにっこり笑って消えていく。“Whose is the child. . .?” の is が “Was the child mine. . .?” と was になることで “Tis past!” の一言につなげ、 “. . . I stray hunting. . .” の “hunting” の言葉に ghost を連想させ、“stray” の現在形に彼女がこれから生ける屍の如く西の荒野を徘徊する姿を連想させることで、Hardy は女の罪を浄化しようとしているようである。ここに Hardy の人間としての優しさと、男女の愛が惹起する悲劇の原因・結果は、脆くて不実な愛の本質を考え合わせると常に単純明快に割り切って説明のつくものではないとする詩人の姿勢が伺われる。

## 5

以上 dramatic monologue による物語詩二篇を概観した。題材は共に当時起こった殺人事件を脚色し劇的に構成している。凶行に及んだ動機に多少の差異こそあれ、その中核に男女の恋愛感情を据え、愛が殺意に変わる瞬間的な行動と衝動にドラマを集中させている点で一致している。‘Porphyria’s Lover’ では希求して止まない女の愛を初めて得た瞬間、その愛の永遠性を今に完成するために女を絞殺する。‘Trampwoman’s Tragedy’ では、目の前で他の男と戯れてみせる女の姿態に嫉妬、逆上の果て



に相手の男を刺殺する。前者は「男は最愛の女を殺す」後者は「最愛の女を奪おうとする男を殺す」という図式が成り立つ。何れにせよ愛するが故の殺人行為である。では、いったい愛とはどんなものか、一見甘美に香る愛の裏面に人の理性を狂わす魔性的要素がひそんでいるのか。二つの詩に描かれた男女の愛を通して、両詩人が愛の本質をどのように捉えているかを考察した結果、愛の本質を不安定で利他的で非永続的なもの、時の経過とともに風化する脆いものであると認識している点で一致していることが分かった。例えばポーフィリアの恋人が「この瞬間、彼女は私のものだ」と狂喜して女を絞殺し

た心理も、恋人を奪われまいと相手の男を刺殺した男の心理もその深層では、愛への不信があり愛に永続性がないことを知りながら、なお愛に永遠性と誠実さを希求するジレンマから生じる不安と苦悩からの解放を死によって願う現実逃避と、女を独占・支配しようとする男のエゴイズムを相乗させ、愛は利他的なものではなく、むしろ利己的なものであるとも指摘している。しかしその何れにせよ、愛の永遠性を保持したい人間の願望には自殺であれ、他殺であれ常に死の誘惑がつきまとう愛の宿命とも言える悲哀を示唆しているように思えるのである。

#### 文 献

- 1) Paulin T (1975) *The Poetry of Perception*, Macmillan Press LTD, London, pp 86.
- 2) Gibbon J and Johnson T eds (1979) *Thomas Hardy: Poems*, Macmillan Education LTD, London, pp 151.
- 3) *Ibid.*, pp 107
- 4) Knickerboker KN (1951) *The Selected Poetry of Robert Browning*, The Morden Library, New York, pp 221.
- 5) Hardy T (1974) *Far from the Madding Crowd*, Macmillan, London, pp 221.
- 6) 瀧山徳三 (1974) ブラウニング研究序説, 南雲堂, 東京, pp 25.
- 7) アト・ド・フリース (1984) *Dictionary of Symbols and Imagery*, Taishukan, Tokyo, pp 103.
- 8) *Ibid.*, pp 306.
- 9) *Ibid.*, pp 635.
- 10) Shaw WD (1968) *The Dialectical Temper*, Cornell University Press, New York, pp 75.
- 11) Hardy T (1965) *The Collected Poems of Thomas Hardy*, Macmillan, London, pp 182. を参照.

“Blue Jimmy” (Stanza X.) was a notorious horse-stealer of Wessex in those days, who appropriated more than a hundred horses before he was caught, among others one belonging to a neighbour of the writer's grandfather. He was hanged at the now demolished Ivel-chester or Ilchester jail above mentioned—that building formerly of so many sinister associations in the minds of the local peasantry, and the continual haunt of fever, which at last led to its condemnation. Its site is now an innocent-looking green meadow.